



紹介者

平岡 昭良

日本ユニシス
取締役社長

大谷 邦夫

ニチレイ
取締役会長



春の映画

夫婦ふたりの共通の趣味といえば映画鑑賞なので、この3月は最新のアメリカ映画2作品を、もちろん夫婦割引で観た。

そのうちの一本が、クリント・イーストウッド監督、主演の「運び屋 “THE MULE”」。家族をなおざりにして園芸の仕事一筋で生きてきた主人公（役名はアール・ストーン）が破産に陥り、コカインの「運び屋」に転落してしまう物語だが、イーストウッドの絶妙の演技に加え、ブラッドリー・クーパー演じるベイツ捜査官とダイナーで出会って会話するシーンなども味のある仕上がりになっていた。個人的には「アンタッチャブル」のストーンや「ゴッドファーザー Part Ⅲ」のビンセントに扮して印象深い、同い年生まれのアンディ・ガルシアが麻薬組織のボスで出演していたのは懐かしかった。

もう一つがアカデミー賞3部門を受賞したピーター・ファレリー監督の「グリーンブック “GREEN BOOK”」。上映時間は2時間を超えるが、いろいろと考えさせられる、佳い映画である。まだまだ人種差別が残る1960年代のアメリカを背景に、「神の域の技巧」を持つ黒人天才ピアニスト、ドクター・シャーリー（マハーシャラ・アリ）と粗野で無教養だが、愛すべきイタリア移民の用心棒兼運転手、トニー・リップ（ヴィゴ・モーテンセン）との間に生まれる真摯で温かい結び付きをテーマに据え、細かいオチ…これがなかなかセンスがいい…を随所につけながら観客を笑わせ、感動させる作品となっている。

日本にいれば、欧米に限らず中国やインド、中東諸国の映画などを鑑賞できるが、それぞれの国の文化や生活、そしてその国でどのような社会問題が今注目されているのかなど、映画を通して率直に実感できることはありがたい。3月の2本はそれぞれ、家族をはじめとした「人との結び付き」の大切さを教えてもらったが、特に「グリーンブック」では、「才能に、勇気がなければ人生（世の中）は変えることができない」というメッセージを受け取ったと思っている。それにしても、主人公トニーのケンタッキーフライドチキンやピッツアの食べっぷりは秀逸でした……。

▶▶ 次回リレートーク

小林 明治

日油
取締役会長兼会長執行役員